

訪問看護をめざす看護師を対象とした学び直しプログラム における自己決定的な学習に必要な個別的学习支援

吉 本 照 子 (千葉大学大学院看護学研究科)
青 山 美紀子 (首都大学東京健康福祉学部看護学科)
川 西 恭 子 (順天堂大学医療看護学部)
小 坂 直 子 (宮崎県立看護大学看護学部)
辻 村 真由子 (千葉県立保健医療大学健康科学部看護学科)
伊 藤 隆 子 (千葉県立保健医療大学健康科学部看護学科)
石 橋 みゆき (千葉大学大学院看護学研究科)
緒 方 泰 子 (千葉大学大学院看護学研究科)

訪問看護をめざす看護師を対象とした系統的・個別的な学び直しプログラム(14科目360時間)における個別的学习支援の内容と評価について報告する。受講者は10人、全員が女性で、30歳代以下7人、40歳代以上3人であった。看護経験合計年数は全員が5年以上で、修了後4ヵ月までに6人が訪問看護師として再就職した。

個別的学习支援の内容は、【受講者自身による学習目標設定の考え方と具体的な方法の明示】、【よりの確な自己評価および自己の強みの意識化に関する促し】、【受講者の学習ニーズおよび個人生活に即して受講の効果を高めるための環境調整、促しおよび評価的支援】および【就職先の選択に関わる考え方と具体的な情報提供】であった。受講者は、【看護の基本・基礎の再確認による訪問看護の基本の理解】、【訪問看護に必要な知識を得るための学習方法の習得】、【訪問看護に必要な知識・技術および実践方法の習得による自信の獲得】、【自分がめざす訪問看護の明確化による再就職への意欲の高まり】および【目標達成評価にもとづく今後の課題の明確化】を達成したと評価し、個別的学习支援担当者による「自分の強み・弱みの明確化による学習目標の設定および達成方法の習得への支援」等を認識していた。

今回の個別的学习支援は、受講者が的確な自己評価をもとに自ら学習目標を設定し、学習の技能および必要な知識を習得して、根拠にもとづいた自信を得るという、成人学習者の自己決定的な学習を促したと考える。

KEY WORDS : visiting nurses, learning support, re-education, self-determined learning

I. はじめに

国の在宅ケア推進の政策により、24時間体制の訪問看護が期待されているが、その供給量はまだ不十分であり、厚生労働省の訪問看護支援事業に関する検討会において、訪問看護の安定的供給とサービスの充実に向けた訪問看護師数の目標設定が提言されている¹⁾。

訪問看護師は、小児から高齢者、難病、ターミナル期等の広範な対象者を主に単独で訪問し、判断し、看護および評価を行う。そこでは、看護に対する的確な自己評価基準および他者に説明し、必要な支援を求める能力が必要である。さらに、利用者の居宅で単独で看護を行う環境では、知識、価値観、技能等の学習に

重要な役割を果たすモデリング²⁾が適用されにくいと考えられる。

こうした訪問看護の量的・質的人材確保への期待と現状をもとに、著者らは、訪問看護に関心をもち、「教育歴や看護経験に関する多様な背景(多様な背景)」を有する看護職者が、自律的に活動するための系統的・個別的な「学び直しプログラム(プログラム)」を開発し、2008年度の実施・評価をもとに、2009年度に、各受講者の知識・技術に関する具体的な目標設定および自己評価に対する支援を強化し、実施・評価した³⁾。プログラムの外部評価および第三者評価では、こうした支援の視点と方法の明示、および実践の場での活用が今後の課題とされた⁴⁾。

一方、訪問看護師の継続教育に関する医学中央雑誌の検索結果では(期間:2000-2010年、検索語:訪問看護

×看護師×継続教育), 訪問看護師のキャリア開発のための効果的な学習支援に関する報告がほとんどみられなかった。そこで本稿では, 2009年度のプログラムにおける個別的学习支援の内容と受講者の学習目標達成評価をもとに, 多様な背景を有する看護師が, 訪問看護に移行する時に必要な学習支援の内容について報告する。

II. 2009年度のプログラムの概要

自律的に活動する訪問看護師を育成するというプログラムの目的に対し, 多様な背景を有する看護師が系統的な授業科目を活用し, 各々の学び直しニーズを充足するために, 個別的学习支援を強化し, 論述力強化等の新規授業科目および補強講義を提供した。また, 再就職支援の強化として, 各々がめざす訪問看護のイメージを形成するための早期訪問看護実習, および2008年度修了者の活動状況を理解するための交流会を実施した³⁾。実施期間は2009年9月1日-12月11日であった。

受講者は10人で, 全員が女性, 30歳代以下7人, 40歳代以上3人であった。看護経験の合計年数は5年以上10年未満2人, 10年以上8人であり, 病院看護師経験のみは4人, 病院看護師経験のほか訪問看護・社会福祉協議会・介護支援専門員等の在宅ケア関連の経験を有する者は6人であった。修了後, 6人が訪問看護師として再就職し, 3人が訪問看護や地域連携部署等における活動をめざして病院看護師として復職または再就職し, 1人は就業先を探索中であった(2010年4月1日時点)。

III. 方 法

1. 個別的学习支援の実施方法

・個別的学习支援担当者(支援担当者): 3人配置し, プログラム責任教員1人と協力して個別的学习支援を行った。全員が修士以上の学位を有し, 訪問看護ステーション管理者, あるいは看護系大学の常勤・非常勤教員として, 在宅看護実習の指導経験を有していた。

・個別的学习支援の方針: 受講者が不安なく受講できるように配慮し, 講義・実習では疑問や不安を迅速に解決する; プログラムの強化項目としてフィジカルアセスメント, コミュニケーション, 論述力強化の学習成果を各自が多様な機会で発揮できるようにする; 受講者がプログラムにおける学びを統合しながら, 自己の強み・弱みを認識できるようにする; 多様な教育・看護経験をもつ受講者の学び合いを促す, とした。

・個別的学习支援方法: 各支援担当者が受講者3-4人を受け持ち, 継続的に個人面接および実習における学習支援を行った。個人面接は, プログラム開始時・訪問看護

実習前・プログラム終了時に, 約30分/回, 計3回, 個室にて行った。多様な背景の受講者が, 各々の学習目標と課題, および自己の強み・弱みを明確にするために, 自製の自己評価票を用いて, 受講者の自己評価の点とその評価理由を確認して学習の状況を把握し, 目標達成に向けて支援した。個人面接に先立ち, 支援担当者は支援方法を標準化するために, プログラム責任教員とともに情報交換および調整を行い, 一部の面接をプログラム責任教員と共同で実施した。

実習における学習支援では, 各受講者の目標達成に向けて各実習施設と調整し, メール・面接にて不安や疑問に応え, 実習中に発揮された強みを受講者が認識できるように助言した。またレポートに対し, 各々の学習目標の達成に対する評価的なコメントを記述した。

・自己評価票の作成と活用: プログラムの構成に即して, 授業科目の目的・目標等をもとに11のカテゴリー, 115項目で構成し, 各項目について4段階で評価した³⁾。自己評価票試案を作成し, 内容妥当性を高めるように, プログラム責任教員・支援担当者3人および訪問看護の教育研究者4人の計8人で検討した。クロンバックの α 信頼性係数は, 4つのカテゴリー(0.68-0.77)を除いて0.80以上であり, 授業科目の目的・目標に対応した各カテゴリーの内的一貫性がほぼ確認された。

自己評価票の活用に関し, 受講者に開講前・開講直後に2回の説明会を行い, 自己評価をもとに自己の学習課題を設定して継続的に取り組み, 達成するために活用するという考え方と自己評価票の構成について説明した。

2. 個別的学习支援の評価方法

1) 個別的学习支援の内容

各支援担当者が, 個別的学习支援の具体的内容について, 受講者の状況および支援に対する反応を含めて記述し, データとした。支援担当者1人とプログラム責任教員が, 各受講者に対する単一の支援内容を示す記述を分析単位として抽出し, 個別的学习支援の意図と内容を理解でき, かつ個人が特定されないように配慮しながら, 必要に応じて「…に対し」と状況を含めて, 一文に要約した。各受講者の特性に応じて, 何のために, 何に関し, どのように学習支援を行なったかという視点から, 支援内容の類似性と相違性をもとに分析し, その分析結果について他の2人の支援担当者が検討し, サブカテゴリーおよびカテゴリーを抽出した。次いで, 訪問看護に関わる教育研究者4人による検討をもとに, 必要な修正を行ない, 分析の妥当化に努めた。

2) 受講者の学習目標達成の内容および個別的学习支援に関する評価

各受講者が、プログラム開始時に目標設定シートを用いて目標を記述し、プログラム終了時に目標達成評価シートを用いて評価を行った。学習目標の達成に関する評価項目は、‘学習目標は達成できたか（学習目標達成評価）’、‘教員（支援担当者）から必要な支援を受けられたか’とし、各項目に対する自由回答をデータとした。

回答の意味を把握するまで読み、単一の目標に関する評価を示す記述を分析単位として抽出し、文脈をより明確に示すように、必要に応じて（ ）内に説明を補いながら、一文に要約した。要約したすべての文章の内容を把握して、何をどの程度達成したかという視点から、各文章の類似性・相違性をもとに分類し、サブカテゴリおよびカテゴリを抽出した。個別的学习支援の内容と同様な方法で分析の妥当化に努めた。

3) 個別的学习支援と受講者の学習目標達成評価の関連図の作成

受講者の学習目標達成と個別的学习支援の関連性をもとに、受講者の学習過程をより明確に示すために、受講者の学習目標達成および個別的学习支援のカテゴリ間の関連性を図示した。作図では、系統的プログラムにおける経時的・段階的な各授業科目の受講による学習目標達成として、そのカテゴリを段階的に布置した。ついで、受講者の学習目標達成評価のサブカテゴリ（単一のサブカテゴリの場合は受講者の記述内容）と個別的学习支援のサブカテゴリの関連性と方向性について、支援に対する各受講者の評価、および各受講者の学習目標達成評価の記述内容をもとに確認しながら、双方のカテゴリを関連付けて布置した。

プログラム実施担当者7人による図の検討を経て、系統的なプログラムにおける受講者の学習目標達成の内容と順序性、および学習目標達成に関連した学習支援内容を示す図を完成させた。

3. 倫理的配慮

千葉大学大学院看護学研究科倫理審査委員会の承認を受け、受講者全員にプログラム開始時のオリエンテーションにて、プログラムの報告、改善および活用のために、終了時に同意された方の学習記録を分析対象としたこと、個人情報保護および公表方法等に関する倫理的配慮、プログラム終了時に協力の可否をうかがうことを説明し、協力を依頼した。プログラム終了時に、修了判定の終了を報告し、再度、口頭および書面にて説明と依頼を行い、書面にて協力の可否の回答を得た。

IV. 結果

【 】はカテゴリ、<>はサブカテゴリ、「」は分析単位の要約，“ ”は発言の抜粋を示す。個別的学习支援の内容に関し、30の分析単位から12のサブカテゴリおよび4つのカテゴリを抽出した（表1）。受講者の学習目標達成の内容に関し、42の分析単位から13のサブカテゴリおよび5つのカテゴリを抽出した（表2）。各カテゴリおよびサブカテゴリの内容を以下に示し、個別的学习支援と受講者による学習目標達成評価のカテゴリの関連を図1に示す。

1. 個別的学习支援の内容

1) 【受講者自身による学習目標設定の考え方と具体的な方法の明示】

受講者が各々の職業・学習経験をもとに、自分がめざすことに向けて、他者の支援を得ながら、訪問看護師として必要な知識・技術をどのように習得していけばよいかを計画するために、具体的・現実的な目標の記述に関する考え方と方法を明示した支援である。

プログラム開始時に、過半数の受講者の目標は、「訪問看護に大切なことを学ぶこと」、「現在の医療・機器の進歩に追いつく」等のように、学習目標の達成度を評価しうる具体性があまりみられなかった。そこで、支援担当者は、受講者に学習目標設定の考え方と具体的な方法を説明し、学習目標を加筆修正するように指導した。学習目標の記述方法に関し、「自分が（実習等で）行いたい（学びたい）看護を（他者に）伝える方法を指導した」結果、受講者は文章を推敲し、動機を明確に示すことにより、自分の意図が読み手に的確に伝わることを理解した。

2) 【よりの確な自己評価および自己の強みの意識化に関する促し】

自律的な訪問看護師として活動するための自己評価の必要性を理解し、成長の意欲をもち、適切な評価基準をもとに肯定的・より客観的な自己評価を行ない、自分の強みを資源として活用しながら学習する方法を習得するための動機づけや気づきを促す支援である。

(1) <自己評価の必要性和意味づけ>

受講者の年代あるいはこれまでの就業環境によっては、自分の考えを主張する、あるいは自己評価をもとに学習課題を自律的に設定するという学習方法に慣れていないため、「自己評価の必要性を認識できるように説明した」。その結果、自分を評価することの戸惑いが徐々に消え、焦点化した目標に対する自己評価に関し、自信を持つようになった。

(2) <自己評価の基準が高いことへの気づきの促し>

自己評価が低い状態では、新たな学びの促進や新規分野への挑戦は難しいことから、基準が高いことにより自己評価が低いと考えられた受講者に対し、「自己評価の基準が高いことに気づくように振り返りを支援した」。

(3) <肯定的に自己を捉えるための言葉かけ>

的確な自己評価や学習環境への適応には、あるがままの自己を肯定的に捉えることが必要であることから、目標達成への意識が高く、看護技術の習得等が期待通りにはできなかったことを注視していた受講者に対し、<肯定的に自己を捉えるための言葉かけ>を行った。その結果、受講者はより肯定的・客観的な自己評価が可能となり、他者にも肯定的になり“気持ちが悪くなって、他の人の立場に立って物事を考えられるようになった”。

(4) <第三者および訪問看護の視点からみた本人が気づかない強みの提示>

就業期間が短いことを自己の弱みと認識し、再就職に対しても自信が持てなかった受講者に対し、主婦としての経験が在宅看護における強みとなりうること等、人生経験全てが糧になることを助言した。受講者は視点の変換により、弱みが強みとなりうることを理解し、受講開始時には訪問看護を“やってみたい”と述べていたのに対し、訪問看護実習後は“やっていける”と述べた。

(5) <自己の強み・弱みの認識に関する根拠の確認>

知識・技術に関する自己評価の基準が曖昧、あるいは根拠がないと不安が増し、意欲的な学習を妨げる可能性があるため、支援担当者は受講者の自己評価の基準と評価結果の関連を確認し、これまでの看護実践の振り返りを支援し、自己評価の根拠を確認した。「受講者とともに、自己評価票をもとに強み・弱みを含めて具体的に確認した」結果、受講者の発言は“不安ではない”，“これでよいのでしょうか”から“これでよいのだと思えるようになった”に変化し、根拠にもとづく自己評価、目標設定、および課題解決の方法を理解していた。

(6) <強みを活用した弱みの克服に関する具体的な方法の助言>

広範な知識・技術がもとめられる訪問看護師が、チームの一員として何らかの強みを認められることにより、自信をもって役割を遂行できるように、「強みの自覚を促し、強みを活用した弱みの克服に関する具体的な方法について助言した」。

3) 【各受講者の学習ニーズおよび個人生活に即して受講の効果を高めるための環境調整、促しおよび評価的支援】

受講者が各々の個人生活あるいは力量に応じて、より

自主的・主体的に、プログラム全体を活用できるようにするための環境調整および評価的支援である。

(1) <受講者の個人生活と受講の両立のための学習環境の調整および受講者の判断と意思決定に対する支持>

受講に専念できる者、および育児や介護等の家庭内の役割が大きい者が、各々の判断を自他ともに認め合い、グループワークや非公式な対話、情報交換等を通して学び合う共同体をつくれるように、運営上の役割分担や学習室の柔軟な使用等の「学習環境を調整」し、「家庭生活や健康・受講の継続を含めて実習地を選択した受講者の判断と意思決定を支持した」。

(2) <プログラム全体から訪問看護に必要な学びを得るための促し>

仕事や他の学習と並行して行う受講者では、自己の関心に特化して学ぶ態度もみられた。支援担当者は、学びの範囲を早々に狭めることは、系統的なプログラムの効果や学び合いの効果を低減させる可能性があると判断し、「医療技術の習得に特化して実習を進めていた受講者に対し、患者の尊厳や家族を含めた生活に関する学びを重視するように助言した」。

(3) <各受講者の論述力に即した課題の期限設定およびフィードバック>

訪問看護記録は看護の質保証のために重要であり、事実、アセスメント、実践内容を記述する必要がある。論述力強化の授業科目を開講したが、実習レポートの一部は、事実があまり記述されず、感想が主体であった。そこで、受講者の実施内容を確認し、「受講者が口頭で説明した内容を記述するように指導した」。また、学習記録の活用方法には個人差がみられたため、各受講者の負担の軽減とより効果的な学習のために、「必要に応じて提出期限の延長を認めた」。

(4) <個別の学習ニーズを充足するための補強講義および実習の企画調整と運営>

受講者はプログラムの進行にともない、自分が訪問看護師として求められるケアができるように、学習ニーズを拡大あるいは発展させていた。具体例では、緩和ケアの講義をもとに薬剤に関する最新の知識の獲得を希望し、あるいは、これまで学習機会のなかった在宅医療機器に関する知識の獲得や多様な病院のケアの見学実習を希望した。こうした学習ニーズの表出を促し、充足するように、補強講義と実習を企画した。

また、受講者が主体的に実習できるように、「各実習施設に受講者の実習目標を送付して調整し、受講者に対し「施設に理解しやすい目標を記述するように指導した」。

4)【就職先の選択に関わる具体的な情報提供】

多様な就業環境の中から自分に適した再就職先を選択するための考え方と手がかりの提供による支援である。

訪問看護師としての再就職に向けて、受講者は就職先の選択方法を探索し、助言をもとめた。明確な理念、給与の算定基準、教育体制の整備状況、待機の継続時間等の訪問看護ステーションの就業環境に関する情報は、あまり提供されていない。そこで、実習等を通して受講者の特性を把握し、各々の相談に応じて、自分の強みを生かせる職場環境や自分のめざす訪問看護との一致性等、「具体的な情報収集方法を助言した」。

表1 個別的学习支援の内容

カテゴリー	サブカテゴリー
受講者自身による学習目標設定の考え方と具体的な方法の明示	・受講者自身による学習目標設定の考え方と具体的な方法の明示
よりの確な自己評価および自己の強みの意識化に関する促し	・自己評価の必要性和意味づけ ・自己評価の基準が高いことへの気づきの促し ・肯定的に自己を捉えるための言葉かけ ・第三者および訪問看護の視点からみた本人が気づかない強みの提示 ・自己の強み・弱みの認識に関する根拠の確認 ・強みを活用した弱みの克服に関する具体的な方法の助言
受講者の学習ニーズおよび個人生活に即して受講の効果が高めるための環境調整、促しおよび評価的支援	・受講者の個人生活と受講の両立のための学習環境の調整および受講者の判断と意思決定に対する支持 ・プログラム全体から訪問看護に必要な学びを得るための促し ・各受講者の論述力に即した課題の期限設定およびフィードバック ・個別の学習ニーズを充足するための補強講義および実習の企画調整と運営
就職先の選択に関わる考え方と具体的な情報提供	・就職先の選択に関わる考え方と具体的な情報提供

2. 受講者における学習目標達成および個別的学习支援に関する評価結果

2.1 受講者の学習目標達成の内容

1)【看護の基本・基礎の再確認による訪問看護の基本の理解】

受講者は新たな訪問看護の学習に際し、看護の基本・基礎や臨床看護技術の知識を再確認し、「訪問看護でも看護の基本は変わらないことを学んだ」等のように、自己の有する看護の知識・技術と訪問看護の基本との共通性を理解していた。

2)【訪問看護に必要な知識を得るための学習方法の習得】

受講者は、広範な知識・技術の急速な進歩に対する学習態度と方法、さらに、自分の予備知識や他の受講者等

の多様な学習資源の活用方法を習得していた。

(1) <必要な知識を得るための学習態度と方法の習得および課題の抽出>

訪問看護師には、病院との円滑な連携のために、薬物療法等の在宅看護の知識や技術の更新がもとめられる。受講者は系統的プログラムを通して、授業における知識の獲得にとどまらず「最新の知識および最新の知識・情報を得る方法」を意識し、「常に正しいのか否かを考え、情報を集め、行動することが重要」と課題を明らかにしていた。また、広範な専門分野各々の急速な進歩に対し、「全ての知識は持たなくても、必要時に調べていける姿勢と方法を知っていればよい」と、学習方法の習得に関する自己評価の根拠を述べていた。

(2) <多様な学習資源の活用による知識の獲得>

活用しうる学習資源としての「予備知識」、「事前学習」、「講義・実習」「他の受講者」の寄与を認識し、多様な学習資源の活用方法を習得していた。

3)【訪問看護に必要な知識・技術および実践方法の習得による自信の獲得】

受講者は、各授業科目の習得内容と習得度を明確にし、知識・技術および実践方法の習得による自信を得ていた。

(1) <在宅支援システムに関する理解の深まり>

「退院指導・ケアマネジメントを具体的に理解できた」、「在宅支援システムとしての訪問看護師の役割についてまとめた」、「在宅療養者に必要な環境を理解した」等、在宅支援システムに関する理解を深めていた。

(2) <在宅医療機器に関する知識の獲得>

医療機器に関する不安や苦手意識を払拭するために、作動原理等の要点に関する理解が重要であるが、受講者は「在宅医療機器に関する基本的知識」を獲得し、現行の機器について理解していた。

(3) <コミュニケーション能力の向上の実感>

受講者は「講義・グループワーク・発表および実際の看護場面でコミュニケーション技術を深めることができた」、「論述方法に関する（個別）指導を記録や発表の際に活かし、論述力を高められた」等のように、多様な学習機会に論述方法に関する指導を活かし、論述力あるいはコミュニケーション能力の向上を認識していた。

(4) <フィジカルアセスメントの基礎を確認し習得した自信>

「フィジカルアセスメントについて基礎的な知識を明確にし、身につけることができ自信につながった」、「フィジカルアセスメントの方法について基本的知識を見直しながら技術を統合していくことができた」等、基

礎・基盤の確認と学習方法の習得により、自信を獲得していた。

(5) <訪問看護過程の展開に関する習得内容の明確化>

「疾患の知識をアセスメントや訪問看護場面に結び付けて考える」、「自己の看護観が明確になり（相手の立場に立った）評価とアセスメントの視点が明らかになった」等、知識・技術・実践方法の統合を意識化していた。また、「観察項目や予測的な観察はできるが、（訪問看護過程の展開に向けて）質問を発展させることが達成不十分」と、習得・未習得の内容を明確に区別していた。

(6) <訪問看護の実践に関する理解の深まりと自信>

実習等を通して、疾患、対象者の理解を深め、「専門的で実践的な訪問看護の学び」、「連携についての基礎・態度の習得」を認識していた。さらに「ターミナル期の方との関わり」等、自信を得た内容を明確にしていた。

4) 【自分がめざす訪問看護の明確化による再就職への意欲の高まり】

自分がどこでどのように訪問看護師として活動したいかを主体的に考え、明らかにしたことにより、不安を軽減し再就職の意欲を高めていた。

(1) <自分がめざす看護と就業先のイメージの明確化>

訪問看護ステーション実習では、受講者は自身の希望を含めて2カ所の実習先を選択し、自ら情報を収集した。受講者は関心をもった実習先で、「自分にとって好ましい（こうあって欲しいと思う）在宅看護と（そうした看護を実現できそうな）就業先のイメージ」を明らかにしていた。

(2) <訪問看護に関する具体的理解による再就職への不安の軽減と意欲の高まり>

「（医療ニーズの高い療養者の看護方法に関し）自分なりにシミュレーションしたことで再就職への不安が軽減した」、「実習を通し（略）、具体的な看護内容を考察できた」等のように、主体的な学習方法により不安の解決・軽減を認識し、「再スタートに向けた動機づけとなった」と意欲を高めていた。

5) 【目標達成評価にもとづく今後の課題の明確化】

自己評価をもとに課題を自ら明確にするという学習に関する考え方と方法を習得していた。

(1) <目標未達成の学習内容の明確化>

「具体的な文章化や資料なしで（は）説明ができないという自分の弱点が残った」、「関わったことのない分野（小児・精神）や苦手な分野（循環器等）の再学習は達成できなかった」等のように、具体的な学習目標に対して達成の程度を評価し、プログラム終了後の学習課題を明確にしていた。

(2) <仕事を改善するための課題の明確化>

受講後に復職する予定の受講者では、自らの仕事の改善に活用することを意図して参加し、課題を明確にしていた。

表2 受講者の学習目標達成の内容

カテゴリー	サブカテゴリー
看護の基本・基礎の再確認による訪問看護の基本的理解	・看護の基本・基礎の再確認による訪問看護の基本的理解
訪問看護に必要な知識を得るための学習方法の習得	・必要な知識を得るための学習態度と方法の習得および課題の抽出 ・多様な学習資源の活用による知識の獲得
訪問看護に必要な知識・技術および実践方法の習得による自信の獲得	・在宅支援システムに関する理解の深まり ・在宅医療機器に関する知識の獲得 ・コミュニケーション能力の向上の実感 ・フィジカルアセスメントの基礎を確認し習得した自信 ・訪問看護過程の展開に関する習得内容の明確化
自分がめざす訪問看護の明確化による再就職への意欲の高まり	・自分がめざす看護と就業先のイメージの明確化 ・訪問看護に関する具体的理解による再就職への不安の軽減と意欲の高まり
目標達成評価にもとづく今後の課題の明確化	・目標未達成の学習内容の明確化 ・仕事を改善するための課題の明確化

2.2 受講者が認識した個別的学习支援の内容

10人のうち5人は「補強講義、メール対応、情報提供など」「実習に来てアドバイスして頂いた」「自分たちの要望の講義をして頂いた」等のように個別的学习支援の内容のみについて記述していた。他の5人は個別的学习支援の内容とともに効果を記述していた。それらは、「自分の強み・弱みの気づきを促す支援」、「自分の強み・弱みの明確化による学習目標の設定および達成方法の習得への支援」、「実習の目的の不明確さに対する気づきの促し」、「レポートや面接を通した思考過程の支援」および「疲労に対するねぎらいと励まし」であった。

3 個別的学习支援と受講者の学習目標達成評価の関連

図1に示すように、受講者は自分の学習・実践経験をもとに【訪問看護の基本を理解】し、「講義・実習」、「他の受講者」等の学習資源を認識し、【訪問看護に必要な知識・技術・実践方法とその学習方法を習得】していた。さらにプログラム終期の訪問看護実習で「（医療ニーズの高い療養者の看護方法に関し）シミュレーション」等を行い、【自分がめざす訪問看護の具体化】を行っていた。平行して、自己評価、目標設定・評価を行い、【再就職への意欲の高まり】と関連して「具体的な文章化や資料なしで説明（できる）」等の【今後の課題を明確化】していた。

訪問看護に必要な知識・技術・実践方法およびその学習方法の習得に対し、受講者が「レポートや面接を通した思考過程の支援」、「疲労に対するねぎらいと励まし」を認識したように、学習方法の習得を促すための思考過程の支援、疲労に対するねぎらいと励まし等の【各受講者の学習ニーズおよび個人生活に即して受講の効果を高めるための環境調整、促しおよび評価的支援】が関連し、学習目標の設定・評価に関する考え方と方法の習得に対しては、「自分の強み・弱みの明確化による学習目標の設定および達成方法の習得への支援」等の認識が示すように、【受講者自身による学習目標設定の考え方と具体的な方法の明示】および【よりの確な自己評価および自己の強みの意識化に関する促し】が関連していた。自分がめざす訪問看護の明確化に対しては、【就職先の選択に関わる具体的な情報提供】が関連していた。

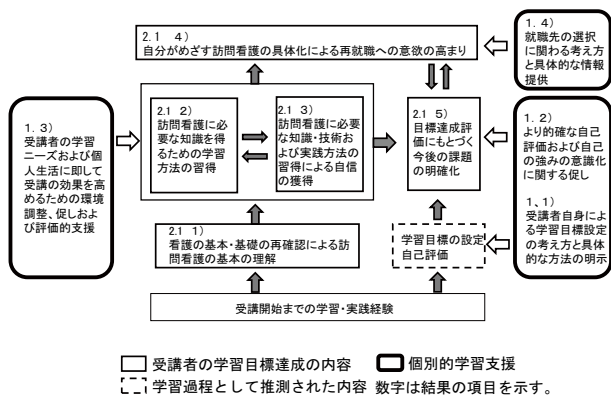


図1 受講者の学習目標達成の内容と個別的学习支援の関連

V. 考 察

1) 受講者の自己決定的な学習過程

図1は、受講者が自分の学習・看護経験をもとに、めざす訪問看護や就業先のイメージ、および今後の課題を明らかにした学習過程を示している。さらに、系統的なプログラムにおけるそうした学習過程が進むために、個別的学习支援が必要であったことを示唆している。

成人学習者の特性の1つとして、自ら学習課題を設定し、学習課題の達成を振り返り、その根拠を得るような自己決定性を徐々に獲得していくことがあげられる⁵⁾。

こうした特性に対し、成人教育者は、学習者が自己決定的な学習技能を獲得するように援助し⁶⁾、学習プログラムでは、学習内容を自ら決定する考え方と技能を得るような学習経験が必要とされている⁵⁾。

受講者は、【看護の基本・基礎を再確認し、訪問看護の基本を理解】しながら、目標設定や自己評価に関する

考え方を学習し、自ら学習目標を設定して自己評価を行ない、【訪問看護に必要な知識・技術の習得に関する自信】および【学習方法を習得】しており、その学習過程は、自ら学習課題を設定し、達成度とその根拠を得るような自己決定的な学習過程であったと考えられる。

2) 受講者の自己決定的な学習過程に必要な学習支援

今回、訪問看護師として必要な知識・技術に関する系統的な学習とともに、論述力強化および自己評価票を活用した個人面接等による個別的学习支援を行なった。訪問看護に必要な知識の系統的学習だけでは、基準の高まりにより自己評価が低下し、自信の獲得を阻害する可能性があった。以下に、受講者の自己決定的な学習過程における、論述力強化および的確な自己評価を行なうための支援の必要性について考察する。

(1) 自己決定的な学習に向けた論述力強化の必要性

学び直しプログラムに参加した看護継続年数5年以上の看護師は、自信のなさ、目標設定の困難さ等の問題認識⁷⁾、および学習ニーズとして、看護師としての目標の具体化、能力向上等を有しており、教育プログラムでは、不安や気づきを表現する力の強化が必要と報告されている⁸⁾。今回の受講者も全員が看護継続年数5年以上であり、さらに、訪問看護師として再就職するという目標を有する看護師であった。しかし、開始時の目標の記述には、達成度を評価しうる具体性があまりみられなかった。

自己決定的な学習には、Knowles⁹⁾が示すような学習計画の技能および学ぶべき課題に関する十分な知識が必要といわれている¹⁰⁾。学習計画の技能として、自己の客観視とフィードバックの受け入れ、役割に必要な能力に対する学習ニーズの診断、成果を示す学習目標の設定、学習目標達成のための資源の明確化等を行う能力があげられている⁹⁾。個別支援に対する受講者の評価や目標達成評価から、受講者はこうした技能を習得したと考える。

このうち、自己の客観視とフィードバックの受け入れに関し、自己の目標を支援者と共有し、有効なフィードバックを得るためには目標を記述する能力が必要である。今回、論述力強化の科目開講とともに、【学習目標設定の考え方と具体的な方法の明示】により、学習目標をより具体的に記述するように支援したことは、学習計画の諸技能の習得の基盤を整えるために必要であったと考える。

(2) 的確に自己評価を行なうための支援の必要性

梶田は¹¹⁾、学校教育の観点から、自己決定的な学習のモデルとして、自信に支えられた心理的安定性、および

自分の現状、可能性や課題等の認識をもとに、自分が選んだ方向へ学び方の知識と技能、および成長の意欲が相乗的に高まることを示し、このモデルは看護職者にも適用されている¹²⁾。図1はめざす方向性と課題を自己決定し、学び方の知識と技能を高めた点で、梶田のモデルと同様であるが、自信に支えられた学習過程というよりも学習過程で自信を得たことを示している。受講者の多くは、プログラム開始時には自信や心理的安定性がゆらいでいたと考えられる。自信が行動の開始に必要であり、また自己評価の維持・向上には行動が必要といわれていることから¹³⁾、支援担当者による自己評価票を活用した【的確な自己評価及び強みの意識化に関する支援】は、受講者が自己評価の判断基準を明らかにし、自信・心理的安定をもとに学習するために必要であったと考える。

【的確な自己評価及び強みの意識化に関する支援】は6つの内容で構成された(表1)。自己評価が自己教育への契機となるには、目標との関連性や見通し、適切な目標水準、客観的な実態把握が必要といわれていることから¹⁴⁾、【学習目標設定の考え方と具体的な方法の明示】は、自分なりの見通しにもとづく自己評価を促すために必要であったと考えられ、図1に示すように、的確な自己評価の支援とセットと考えられる。

＜自己評価の必要性と意味づけ＞は、受講者が成長に向けた自己評価を行ない、継続的に努力する意欲を保つために必要であったと考える。＜自己評価の基準が高いことへの気づきの促し＞は、成長のために目標基準を高める必要がある一方、過剰な願望を追求しないことが自己評価の向上と安定に必要であることから¹⁵⁾、自分に適切な目標基準を見出すために必要であったと考える。

＜肯定的に自己を捉えるための言葉かけ＞、＜第三者および訪問看護の視点からみた本人が気づかない強みの明示＞、および＜自己の強み・弱みの認識に関する根拠の確認＞は、自己評価が低いと他者の力量を認めるにいく危険もあることから、より客観的に自己の実態を把握し、多様な強みを有する他の受講者と学び合うために必要であったと考える。また、＜強みを活用した弱みの克服に関する具体的な方法の助言＞は、受講者が自己の強み・弱みの根拠をもとに、訪問看護への意欲、自信や心理的安定性を高め、めざす訪問看護師像や再就職先を明確にし、就職活動を行うために必要であったと考える。

したがって、論述力強化、および的確な自己評価を行うための支援による個別的学习支援は、学習計画の技能⁹⁾およびその基盤となる自己評価を支援し、自己決定的な学習過程を促すために必要であったと考える。

3) 実践の場における個別的学习支援の活用に向けた課題

今回の個別的学习支援は成人学習者の特性や教育者の要件に即しており、各自の目標達成がみられたことから、多様な背景をもつ訪問看護師が自己評価をもとに成長への意欲を高め、自律的・継続的に学習するために、訪問看護事業所等における人材開発に活用可能と考える。

修了者の再就職後の実践や学習への効果の検証および訪問看護管理者等の学習支援能力の開発が課題である。

謝 辞

修了者および本プログラムの実施にご協力下さった皆様に、心から感謝申し上げます。

引用文献

- 1) 厚生労働省：訪問看護支援事業に係る検討会中間とりまとめ、2010年8月9日。
<http://www.mhlw.go.jp/stf/shingi/2r9852000000mkac-att/2r9852000000mkbv.pdf>
- 2) Cranton, P. (1992)：入江直子、豊田千代子、三輪建二、訳。おとなの学びを拓く。自己決定と意識変容をめざして。鳳書房、115-116、2006。
- 3) 吉本照子、辻村真由子、青山美紀子、ワイマント直美、川西恭子、小坂直子、伊藤隆子、石橋みゆき、緒方泰子、石垣和子：平成21年度文部科学省「社会人の学び直しニーズ対応教育推進プログラム」委託事業：訪問看護師として再就職したい看護職者を支援する学び直しプログラム開発。千葉大学看護学部紀要、32、49-56、2010。
- 4) 平成21年度社会人学び直しニーズ対応教育推進プログラム委託業務成果報告書 3003訪問看護師として再就職したい看護職者を支援する学び直しプログラム開発。千葉大学、43-44、2010。
- 5) マルカム・ノールズ：成人教育の現代的実践、ペダゴギーからアンドラゴギーへ（堀薫夫、三輪建二、監訳）、鳳書房、40-63、2002。
- 6) 前掲書5)11-28。
- 7) 勝又里織、林真紀子、廣山奈津子、斎藤やよい、本田彰子：中堅看護職者が抱える問題と教育プログラムの検討、学び直し教育プログラム受講申込者を対象として、お茶の水看護学雑誌、2(1)、1-10、2008。
- 8) 林真紀子、勝又里織、廣山奈津子、斎藤やよい、本田彰子：中堅看護職者の学習ニーズと学びのプロセス 社会人学び直しニーズ対応教育プログラムの評価。お茶の水看護学雑誌、2(1)、11-22、2008。
- 9) Knowles, MS. (1984). The adult learner : a neglected species. 3rd ed. Gulf Pub., Houston, 184.
- 10) 前掲書2)73。
- 11) 梶田亘一：自己教育への教育。明治図書、36-49。1985。

- 12) 酒井明子：今,看護に必要な力 自己教育力 自己教育力 分に自信があるのか. (高野優, 訳), 紀伊国屋書店, 23, に関する文献学的考察, *Quality Nursing*, 9(12), 1076-2000.
1084, 2003. 14) 前掲書11)80-89.
- 13) André, C,et Lelord, F.: 自己評価の心理学,なぜあの人はい 15) 前掲書13)216-220.

INDIVIDUAL LEARNING SUPPORT FOR PROMOTING SELF-DETERMINED LEARNING IN A RE-EDUCATION PROGRAM FOR NURSES AIMING TO WORK IN HOME CARE

Teruko Yoshimoto ^{*}, Mikiko Aoyama ^{*2}, Kyoko Kawanishi ^{*3}, Naoko Kosaka ^{*4}, Mayuko Tsujimura ^{*5}
Ryuko Ito ^{*5}, Miyuki Ishibashi ^{*1}, Yasuko Ogata ^{*1}

^{*}: Graduate School of Nursing, Chiba University

^{*2}: Division of Nursing, Faculty of Health Sciences, Tokyo Metropolitan University

^{*3}: Juntendo University School of Health Care and Nursing

^{*4}: Miyazaki Prefectural Nursing University

^{*5}: School of Nursing, Chiba Prefectural University of Health Sciences

KEY WORDS:

visiting nurses, learning support, re-education, self-determined learning

In this study, we reported the details of individual support and assessment provided in a re-education program (comprised of 14 subjects, 360 program hours) for nurses aiming to work in home care. The 10 participants were all female, with 7 people in their thirties or below and 3 people in their forties or above. They all had nursing experience of 5 years or longer prior to entering the program, and 6 of them started working as home care providers within 4 months after completing the program.

The individual learning support consisted of: [communicating with the participants to clarify their learning goals and how to achieve them], [encouraging the participants to assess themselves more accurately and realize their strong points], [considering and adjusting to the learning needs and personal lives of the participants to promote the effectiveness of the program], and [providing practical information on how to select a place of employment]. The participants responded that they learned to achieve the following: [understand the basics of home care through re-studying the basics of nursing], [learn how to obtain the knowledge required for home care], [gain self-confidence to acquire the knowledge, skills, and practices required for home care], [improve motivation to start a new job through clarifying the home care service to be provided], and [clarify future tasks based on the assessment of achieved goals]. The participants were also aware of the support officers' "assistance for learning how to achieve goals through clarifying strong and weak points". The results suggest that individual learning support was effective for promoting self-determined learning for the participants to set their learning goals based on more accurate self-assessment, review their studies, and obtain results and self-confidence.

